

シュムペーター
經濟發展の
理論

塩野谷祐一
中山伊知郎訳
東 畑 精 一

經濟發展の理論

一九三七年七月二〇日 第一刷發行
一九八〇年九月二六日 改訂第一刷發行 ©

定価四三〇〇円

訳者

塩野谷祐一
中山伊知郎
東畑精一

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ノ橋一五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三六五二
振替東京 六三三〇

印刷・法令印刷 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

シュムペーター

經濟發展の理論

企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回轉に関する一研究

塩野谷 祐一
中山伊知郎 訳
東 畑 精 一

岩 波 書 店

THEORIE DER WIRTSCHAFTLICHEN
ENTWICKLUNG, 2. Aufl., 1926

by

Joseph A. Schumpeter

This book is published in Japan by virtue of
the authorization of Elizabeth Schumpeter,
the copyright-owner.

原著第一版序文〔一九二二年〕

本書は、一九〇八年に同じ書店から『理論経済学の本質と主要内容』と題して出版されたものの姉妹編である。私が前著においてとりわけ批判的な議論をおこなったさいに約束したこと的大部分は、本書においてみたされるであろう。ただ取扱方法と素材はまったく異なっているから、私はこれを第二巻ないし続編とは呼ばずに、この著作が前著から独立しても読めるようにとくに配慮した。まえがきとしては、ただ二、三の言葉を述べれば十分である。この著作は理論的性質のものである。それは経済経験の主要な、一般的に記述しうる特徴を取り扱う。それは対象についても方法についても統一的であり、したがってそれが描くのは自己完結的な思想にはかならない。しかしこれは私にとっては最終結果であって、最初から意図していたことではなかった。私はむしろ具体的、理論的問題から、すなわち、初めは一九〇五年に恐慌問題から出発したのである。一步一步進むにつれて、私はいつそう広い理論的問題について独立した新しい研究が必要であることを痛感するようになった。そしてついに、私が問題としていることはつねに同一の根本思想であり、この根本思想が一方においては理論の全領域に関連し、他方においては理論的認識をさらに経済発展という現象の方向へ進めてゆくための里標であるということが明らかにになった。けれども私はこの書物を詳細な学説体系として建設するよりも、むしろそのような体系への本質的基礎をできる限り簡明に叙述するものとしたほうが適當であると考えた。そのような本質的基礎は、今日の理論においてはまだ十分に完成されてはいないからである。第一章は非常に無味乾燥であって、そのためにこれに続く部分の著しい妨げと

なるおそれのないことを願うものであるが、それは他のすべての部分を支配する理論的考察方法を読者に説明している。これに続く六つの章は(訳者註)この書物においてとくに重要な内容を叙述している。

(訳者註) 第一版は七章から成っていたが、この訳書の原本となっている第二版では最終の第七章(「国民経済の全貌」Gesamtbild der Volkswirtschaftと題されていた)が削られて、全部で六章となっている。

私の叙述がかりに注目を惹くことがあるとしても、それはおそらく二つの誤解に遭遇するに違いない。それについてあらかじめ警戒しておきたいと思う。まず第一に、私のこの著作は上に掲げた前著を多くの点において否定するものと考えられるかもしれない。二つの著作における素材取扱いの相違や目標の相違は、そのような印象を惹き起こすであろう。しかしいっそう立ち入って考察すれば、読者は必ずその反対のことを確信するに相違ないと思う。第二に、この著作の結論は、再びそれがかりに注目を惹いたとしても、おそらく多数の人々からはある社会的党派の弁護や反対のための武器という観点から眺められ、それにしがつて判断されるかもしれない。しかし、私は本書をそのようなものとは考えていない。私はむしろ、科学的精神をもって社会事象の科学的叙述に接近しうる人々の存在することを希望している。

私が叙述しようとする思想にはおそらく、またとくに個々の点については、誤りもあるであろう。もし読者がこれによって刺激を受け、この中には「事態にそくしたなんらかの真理がある」という確信をえられるならば、私はそれだけでまったく満足である。ここに述べられている事実や議論は、最も良心的な研究にしたがい、また学問の現状に関する最も正確な知識にしたがつたものであつて、これらに対して経済理論は無関心ではありえないはずである。それ以上に私の望むところはまったくなく、この著作のごときはできるだけすみやかに追い越され、忘れられることを希望するばかりである。

ウィー
ン

一九二一年七月

シ
ュ
ム
ペ
ー
タ
ー

原著第二版序文〔一九二六年〕

ほとんど十年このかた、まったく品切れとなっていた本書の第二版を出版するに当って、本書に対してなされたあらゆる批判に答え、また本書に述べられている思想を統計的、歴史的に綿密に実証することは、おそらく私の義務であつたに違いない。そのいずれもがこの思想そのもののためになるであろうということは私にも分つてゐる。

批判者に対する反駁は理論の深化のための根本的な方法の一つであつて、これによって理論が信頼される範圍は増大し、またしばしばこれによって始めてそれが理解しうるものとなる。もし反駁がなかつたならば、批判者自身はもとより読者もまた、彼らの異議やそれから生ずる否定に満足してしまうのはきわめて当然である。それにもかかわらず、私はごくわずかの場合にしかそうしなかつた。これはけつして私に対する批判者を十把一束に評価したわけではない。そのことは、否定論者の中にボームーバヴェルク(Böhm-Bawerk)が含まれているということによつても明白であらう。さらに、事実探求と理論とを相互に噛みあわせてゆく必要を、私は今日では当時よりもいっそう強く感じてゐる。しかしこの方向においても、私は若干の暗示以上には出てゐない。これは最良の実例によつて確証される正確な方法から私自身が離れることにほかならない。しかし私がこれをあえてした理由は、本質的な思想をいっそう明瞭かつ尖鋭に浮かび上がらせるためであつた。そればかりでなく、私は最も嚴密な自己吟味によつて、かつて述べたことの正当性をますます確信するにいたつたことをなんの誇張もなしに確言することができる。われわれが社会生活およびその諸問題について生み出す思考にとつて本質的な事象こそが問題であるから——企業者、企業者利潤、資本、信用、利子および恐慌の主題についての見解なしには、またそれらについての誤つた見解

をもつてしては、經濟の世界においてわれわれに興味を惹き起こし、われわれを動かしつつあるいっさいのものに對してまったくなんの合理的発言もすることができないであろう——、私はわれわれの主題に接する理論的、統計的特殊問題の叢林にさらに一步を踏み込むよりは、むしろこれらの問題群にとって重要なことがらを簡潔に、單純に、新しい表現で、またできる限り印象的に再び読者に示そうとするほうが事態により忠実であると信じたのである。

かくして、この版はなによりも短縮されることになった。初版の第七章はまったく省略されている。この一章がおよそ影響力をもったとすれば、それは私にとってはまったく望ましくない仕方でおこなわれた。ことにその中に示された文化社会学の断片は、読者の注意をともしれば無味乾燥な經濟理論の問題からそらせるものであった。しかもこれらの問題の解決が理解されることを私は望んでいるのである。またこの断片はときには一種の賛成論を生み出したけれども、それが私にとって望ましくないことは、私の説にしたがうことのできない人々の反對論と同じであつた。第一章、第四章および第五章はほとんどそのままである。私がそこから削除してもよかった部分も多くはそのままにしておかなければならなかつた。なぜなら、それは當時ただちに提起されるおそれのあつたいろいろな異議に對してあらかじめ答えたものだからである。もちろん、これらの章も若干の短縮、補足および叙述の変更を受けている。したがって、私はこの書物の内容を問題にしようとする専門家に對しては、今後この新版のみを利用されることを希望する。第三章においては銀行による購買力創造の限界が問題とされる。この領域は、その他の点についてはほとんど問題のない本書の信用理論に對して最も多くの異議を生み出しているが、この部分は第一版よりもいっそう十分に取り扱つたつもりである。その他の変更は表現上のものにすぎない。第二章はそれ以下のすべての部分が生れてくる基本構造を与えるものであるが、それはほとんど全文にわたつてまったく新しく書き直

された。この修正に当っては、以前に青年らしい冗長と自負をもって書かれ、したがってそれ相応の抵抗を招きがちであった多くの部分を削除した。しかし、いまやすべてがより正確に、より精密に書かれているとしても、また反省や経験によって現在眼前にある事象を見る視角が変更されたとしても、本質的な点は依然として同じである。第六章は「第一項」を除き同じように新しく書かれたものであり、また多くの個々の点についてあるいは補足されあるいは簡単にされた。しかしここでもまた、第一版の叙述から完全な理解を望むのは無理であったから、私はその改訂に当って最も鋭い批判者に同意し、またこの議論の本質をとらえていない他の批判者を咎めないことにしたけれども、私はなお、今この新しい叙述にまとめたものが事実上景気問題の真の解決であり、しかもそもその始めからそうであったと思っている。

私はこの新しい形の本書と一九一一年の初版（出版は一九二二年）との基本的同一性を表現する必要から、遺憾ながら表題をそのままにしなければならなかった。この表題がいかに不適當であるかということは、いまだに各国から続々と寄せられる私の「経済史に関する著書」についての問合せによって明らかである。新しく付加された副題はこの誤解に対抗するためのものであって、読者がここで見出すものは、あらゆる他の経済理論と同じように、経済史とはなんの関係もないことを示している。私はそのほかにもところどころを修正したい希望をもっていたけれども、それは本書がすでに自分から離れた存在であるという考慮によって、すなわち本書はすでに一度存在したものであり、そのようなものとしてわれわれの時代の理論的文獻の中にその地位を確立したものであるという考慮によって制限を受けざるをえなかった。

今日これを読む人は、良かれ悪しかれ本書がなにを与えるかを知ってくれるであらう。しかし、それは対象の性質上、単なる単純化によっては取り除くことのできない思考の複雑性をもっているために、その議論に対する読者

自身の冷静な勉強なしにはまったく近づきにくいものである。理論的訓練に欠けているためにこの勉強をすることのできない人、あるいはその努力を価値なしと考えるためにこの勉強をしようと欲しない人は、本書を読んでも時間の損失であろう。とくに本書は、著者がたとえば景気回転の原因というような個々の問題についてどのような意見をもっているかを確かめるために「索引的に用いる」ことはできない。恐慌についての一章は単にそれだけではこの答えを与えるものではない。なぜなら、それは実際に長い思考関連の一環として独立のものではないからである。孤立してこれを読んでも、未解決の問題や明白な異議を後に残すにすぎない。この書物の中からなにものかを獲得できると思うほどの人は、これを熟読しなければならない。そのような人のためには次の案内が役立つであろう。第一章は、第五章の利子理論の議論において重要となる若干の命題を除いては、専門家にはなにも提供しない。したがってこれを省略してもさしつかえない。ただ後の叙述において論証が不十分と思われるような場合には、それについて異議を唱える前にここに立ち返ってもらいたい。第二章の各命題はすべて重要である。第三章においては、前後の脈絡を害することなしに省略することのできる部分を「付録」として区別した。もし第二章および第三章を自分のものとしてしまえば、その後に続く三つの章のいずれを理解するためにも必要とされるすべてのものをえたことになる。この根本思想をただちに承認する人は、第四章についてはただ始めと終りとを読めばよい。そして第五章の議論の若干部分は、ただ特殊な研究者、とくにここに述べられた考え方に対して根本的に反対しつつある専門家のためのものである。第六章にはきわめて多くのことがらが極度に圧縮されている。したがって、一つの命題を看過しても、賛成的な理解を妨げることにならう。

ボン・アム・ライン 一九二六年十月

シュムペーター

原著第四版序文（一九三五年）

本書の第四版は第三版と同じように、第二版そのままの再刷である。第二版は、一九一一年のテキストについて一九二六年の夏叙述上の修正を行なったものであり、また近く出版される英訳書および仏訳書、すでに出版されたイタリア抄訳書および計画中の日本訳書の台本となったものである。私はこのテキストを必ずしも完全に最終的なものとは思わないが、しかし今日にいたるまで、これに加えたいと思う仕事を果す時間をもつことができなかった。もちろん、本書で取り扱われている問題の範囲そのものは最近の私の研究計画の中でますます大きな地位を占めているが、しかし私はこれを異なった側面から取り扱っているのである。私はこの問題の範囲の統計的および歴史的材料を、私の力の及ぶ限り、またハーバード大学の社会科学調査委員会がロックフェラー財団の基金から親切にも私に処分をゆだねた研究費の許す限り、「仕上げる」ように努めている。この仕事に当って研究上の用具となったものは、私の理論的図式ないしはモデルであった。そして私はこれがあたかも唯一の頼みの綱として働くことをしなればば経験する機会をもった。第四版への案内として、これに関して二、三のことを述べることを許してほしい。

（訳者註） 英訳書（一九三四年）、仏訳書（一九三五年）、およびイタリア抄訳書（一九三二年）はそれぞれ出版されている。

これらの事実分析にさいしては、一方においてとりわけ景気問題、他方において私の理論の単なる実証以上のものが問題であった。しかし本書の読者は、単にその最終章のみではなくて、本来各ページが景気問題と関係をもっていることをやがて理解するであらう。これはまったく当然である。人が均衡理論の領域を離れるやいなや、彼はすでに景気の流れの中を泳ぐのであって、どのような現象もこれと無関係には完全に説明することはできない。す

なわち、ここではどのような叙述も、その対象がなんであれ、結局は景氣的関連についての叙述と化するものであって、これは景氣交替こそが資本主義の生活形態であるというシュピートホフ(Spiehoff)の言葉を確証するものにはかならない。私の理論はこの時代における經濟變動についての一個の論理的に完結したモデルを提供しようとするものであり、またそのような任務を果す限り、それは必然的に同時に景氣交替ならびにその中に現われる一連の個別現象の説明を与えるのである。したがって、景氣の事實的材料に関する研究は、おのずからわれわれが均衡問題の範囲外において必要とするあらゆるものを供給することになる。したがってまた、この材料およびそれが示す状況は理論にとつての尽きることのない若き泉でもある。理論はここから、単に景氣交替はどのように説明されるのか、景氣交替の一定の説明からなにがえられるかなどの問題をはるかにこえて、たえず新しい観点、新しい問題設定、新しい方法を汲みとることができるのである。もっとも私は本書の立場について、あたかも現存諸理論の實証が統計的および歴史的事情の研究の目的であり課題であるかのように述べることもできよう。しかし私はこのような立場には組みしない。

いずれにしても、われわれはまず「実証」とはなんであるかについて意見の一致をみなければならぬ。どのような事實状態も、それが分析され洗練されて、いい限り、そもそも理論的叙述が真であるか偽であるかを立証することはできない。統計的ないし歴史的、事實の考察によって、ある理論が事実と合致するかどうかを示されうという、ことさえ正しくないであろう。なぜなら、まったく真実の關係でさえも他の要因によって覆い隠されていることがあり、その結果、事實状態そのものについての深く掘り下げた分析がなければ、われわれはこの關係についてなにも知ることはできないからである。かくしていっそう控え目な目標だけが達成可能なものとして残されるのである。すなわち、ある学説の主張する關係はどの程度は、つきりしたものであるか、いいかえればこの關係が事實状態

の理解に対して貢献する大きさはどの程度であるかを確定することである。このことはさらにあらゆる科学のあらゆる領域においても同じである。ただ多くの場合、すなわち理論は、必要なデータが与えられるなら、効果の計算を可能にしなければならないということが要求される場合には、そのような目標といえどもけつして控え目なものではない。例を挙げてこれを明らかにしよう。物理学者は次のようにいう。ボーア・アーン・ゾムマーフェルドの原子理論は、その仮定によつては、多数の電子を含む体系の静止状態のエネルギー値を計算することができないから役に立たないのであつて、その恣意的な主張とかその論理的難点とかはこの点に比べればずっと大目にみることができると。このような態度の意義と価値は明白である——すなわち、科学的研究の遂行にとつて重要なことは、なんらかの「真理」ではなくて、人が作業するに當つて用いる方法であり、簡単にいえば、観察される事実に対応するなんものが現われてくるようにデータを取り扱うということである。そしてこのような観点から「真」とか「偽」とかの名称が与えられるのであるが、もし人がこの場合、思索的な人々を当然激怒させるに足るプラグマティズムを奉ずるものであることをみずから意識している限り、このこと自体はけつして不幸なことではない。

いまこれをわれわれの關係に還元し、またわれわれの材料はつねに攪亂的要因の影響にさらされており、しかも純粹に統計的に見るなら、しばしば非常に不完全なものであり、したがつて信頼しがたいものであるという事情を考慮すると、結局これは次の諸点を要求することにほかならない。すなわち、

一 われわれの理論がその性質上計量的表現を許すならかの叙述をするときには、またこの叙述に対して必要なデータが与えられるときには、われわれの理論は事実状態と合致する計量的結果をわれわれに与えることを可能にすること、

二 われわれの理論がその性質上ないしは、データの状況上計量的表現を許さないならかの叙述をするときには、

われわれの理論は、事実状態が大体において理論の基礎に立って期待されるようなものであることをわれわれに洞察させること、

三 これらのいずれの場合でもないときには、われわれは、その原因となった具体的事情ないし具体的攪乱要因、ならびにその影響の方向と——正確なあるいはおおよその——程度とを証明することができ、したがってその場合においても、適当な修正によって事実状態が理解しうること、これである。

以上の点よりもより少ないことを要求するのは私には不十分であると思われ、また少なくとも、未完成な労作の証拠であると思われるし、またこれ以上のことを要求するのは私には滑稽であると思われる。私は一年以内に公刊される書物の中で、本書の理論は、これに対する検証をなしうる場合には、これらの要求をすべて満たしていることを証明しようと思う。不明瞭な点がある場合には、それはいつでも材料が欠けているかあるいはそれが信頼するに値しないかによる。材料が明白に物語るときには、ただ時々の明らかな攪乱の場合を別とすれば、それはいつでも理論的予想と合致する。いいかえれば、時系列の形で存在する材料の部分については、これらの系列、すなわち価格指数、物価、商品総量および個別商品数量の指数、所得、とりわけ利潤と賃金、利子率、失業、商品売上高、小切手預金勘定、支払停止、資本投資などは、いずれもわれわれの理論が正当である限り、予想されるように動いているのである。もちろんこれらの場合には、われわれのものは異なる別の説明がなされる余地も十分に存在する。なぜなら、時系列は単に歴史的過程の数量的輪廓を示すものにすぎず、この数量的輪廓は非常に異なった仕方であり、また非常に異なった経過に影響されて現われるからである。もし人が時系列のみによって用が足りると信ずるならば、それはその価値を著しく過大評価することにはかならない。むしろ時系列の歴史的説明、いいかえれば経済生活において年々——またできれば月々——実際に起こったことがらを確定することは、単に「外部からの攪乱」の

(XVI)